

佐賀市 28 歴史探訪

さが じょうほん まるあと だんがん 佐賀城本丸跡の弾丸

佐賀城本丸歴史館建設に伴う平成11年の発掘調査において、「椎の実」型の弾丸が発見されました。

「外御書院」と呼ばれる建物跡の南側で発見された弾丸は、全長2.7cmほどで、お尻の部分には深さ1cmほどの円錐形の穴があります。この弾丸は、イギリスで開発されたエンフィールド銃の弾丸と考えられます。エンフィールド銃(古文書にはエンピール銃とあります)は、幕末期に佐賀藩を初めとした有力な藩が当時の上海から大量に輸入していたようで、明治に入ってから政府軍で使われていました。

今回発見された弾丸は、幕末当時の佐賀藩のものか、明治7(1874)年の「佐賀の乱」に由来するものか、どちらかと思われませんが、どちらともはっきりとはいえません。

「佐賀の乱」では、2月16日未明から18日午前まで、当時の県庁であった佐賀城本丸に立てこもる政府軍と、これを攻める佐賀軍との間で激しい銃撃が交わされました。本丸への出入口である「鯨の門」の門柱には、佐賀軍が撃ち込んだといわれる弾丸の跡が残っています。なかには鉛片がめり込んだままのものもあります。エンフィールド銃は佐賀軍でも使用されていたようなので、その弾丸なのかもしれません。



▲エンフィールド銃(佐賀県立博物館蔵)



▲本丸跡出土の「椎の実」型弾丸(佐賀県教育委員会蔵)



▲「鯨の門」門柱の弾痕

一口メモ

エンフィールド銃は、弾を銃口から詰める先込め銃です。しかし、同じ先込め銃でもパチンコ玉のような丸い弾丸を使う火縄銃やゲベール銃などより、はるかに遠くまで弾が届き、命中精度も高いものでした。その秘密は「椎の実」型弾丸のお尻の穴が発射ガスを受けて広がり、銃身の溝(ライフル)に噛み込んでスピンがかかる仕組みになっているからです。幕末当時では、エンフィールド銃よりさらに進んだ元込め銃が最新式でした。

佐賀城本丸跡周辺見取図

